

歴史家・朝河貫一への旅（一）

—— イェール大学院時代について、Margaret Dimond 宛書簡から ——

甚野 尚志

朝河貫一(1873-1948年)は、今年の2018年8月11日で没後70年を迎えるが、現在、彼の歴史学上の業績は再評価すべき時に来ているように思える。朝河は英文の著作『入来文書(The Documents of Iriki)』(1929年)で、日本の封建制を世界に初めて紹介し、マルク・ブロック、オットー・ヒンツェらのヨーロッパの中世史家から高く評価されたことはよく知られている。しかしそれだけでなく、日露戦争の時期にはアメリカで日露対立の原因について講演活動を行い、英文の著作『日露衝突(Russo-Japanese Conflict. Its Causes and Issues)』(1904年)により日露戦争の原因を客観的に分析し、アメリカ人の共感を得ることに成功した。さらには、ポーツマス条約後の日本の軍国主義的な歩みに対しては日本語の著作『日本の禍機』(1909年)で批判した。その後、第二次世界大戦時の日米開戦に際しては、ルーズベルト大統領から天皇宛の親書の草案を作成して開戦阻止を試みている。現在のようなグローバル化の時代にこそ、歴史家・朝河貫一の発したメッセージは再評価する意義があるのではないだろうか。『エクフラシス』で今後、私が書き続けるエッセーは、朝河貫一の生涯と事績についての断片的な紹介になるかもしれないが、言葉に残しておきたいと思う事柄を書くつもりである。

はじめに

朝河貫一は、戊辰戦争を戦った二本松藩士、朝河正澄の息子として1873年に二本松に生まれ、明治維新後、父親の正澄が伊達郡の立子山尋常小学校の校長に赴任してからは立子山に育った。立子山小、川俣の高等小学校を経て、福島市に最初開設された福島県尋常中学に入学するが、朝河が一年生のときに尋常中学は火事で焼け、その後、学校自体が郡山に移転すると、朝河も郡山に下宿し福島尋常中学に通った。朝河が尋常中学時代に英英辞典の暗記した部分を食べその表紙を学校の桜の木の下に埋めたことや、卒業式の答辞を英語で読み、英語教師のイギリス人ハリファックスが「この人を世界は知るであろう」と述べ感嘆したことは有名な逸話である。

朝河はその後、上京して東京専門学校の文学科に三期生として入学し、同時期に出会った横井時雄牧師により洗礼を受け、クリスチャンになった。当時、キリスト教は西洋文明を体現する宗教とみなされ、西洋文明へのあこがれを抱く多くの若者がキリスト教の洗礼を受けている。朝河は東京専門学校を首席で卒業した後、横井の友人であったダートマス大学のタッカー学長から学

費と寄宿費の免除の申し出を受け、また大隈重信や勝海舟の資金援助もあり、1895年12月にアメリカに渡り、ニューハンプシャー州ハノーヴァーにあるダートマス大学で大学生として学び始めた。そして三年半後の1899年6月に優等生として卒業するが、タッカー学長からは、ダートマス大学の歴史学部で東洋史の部門が加えられる予定なので、大学院に進学し学位取得しそこで教えないかという誘いもあり、大学院への進学を決意する。

朝河はイエール大学、ハーヴァード大学、ジョンズ・ホプキンス大学の歴史学部で願書を提出し、イエールとハーヴァードから入学許可と奨学金授与の約束を得たが、結局、イエール大学の大学院に進学することに決める。ハーヴァードではなくイエールを選んだ理由は、イエールの方が彼の望む制度史研究を行っていたからである。朝河はイエールに進学し、歴史学部で『大化改新の研究(The Early Institutional Life of Japan. A Study in the Reform of 645 A.D.)』で博士号を取得し、タッカーの約束通りダートマス大学の講師となり、その後さらにイエール大学の講師から教授となり、歴史学者としてアメリカで終生活動することになった。

マーガレット・ダイヤモンド (Margaret Dimond) 宛書簡について

ところで、朝河がダートマスの大学生時代とイエールの大学院生時代にどのような生活を送っていたのかについては、彼の日記が残っていないので不明な点が多い。朝河はダートマスの学生時代から日記を付けていたはずだが、彼の死後に残された日記は、1911年から1925年の間と1945年から1948年の間のみであり、それ以外の時期の日記は朝河自身が生前に破棄したものと思われる。破棄した理由はよくわからないが、彼の日記が残されていない以上、朝河のアメリカでの学生時代を知る手がかりは彼が出した書簡が主たるものとなる。ただ、朝河のイエール大学大学院生時代については、彼がマーガレット・ダイヤモンドという女性に対して出した百通余りの書簡が残っており、そのなかで詳細にイエールでの学生生活が述べられている。これらの書簡についてはすでにオーシロ・ジョージ氏が紹介しているが¹、オーシロ氏が書いていない興味深い事実も多く見出されるので、ここではマーガレット・ダイヤモンド宛の書簡から重要だと思われる事実を書き記してみたい。

まず、朝河がマーガレット・ダイヤモンド宛に出した書簡の概要を説明しておこう。マーガレット・ダイヤモンド宛の書簡は現在、福島県立図書館所蔵の朝河貫一発信書簡(D-29-1～111)にあるが、これらの書簡は、マーガレット・ダイヤモンドの死後に遺族が朝河に返したものであった。朝河が彼女の遺族から書簡を返却されたことについては、朝河の1945年12月22日の日記に記載されている。以下に日記の当該部分の翻訳を挙げるが、そこで朝河は、若い頃、新年を迎えるにあたって書いていた「年頭の自戒」の文章を1901年の新年から1905年の新年まで彼女にも写しを送つ

¹ オーシロ・ジョージ「日米史学のバイオニア、朝河貫一の海外留学」朝河貫一研究会編『朝河貫一の世界』早稲田大学出版部、1993年、41-54頁。

ていたこと、そして彼女に送った「年頭の自戒」が、彼女に送った書簡とともに遺族から返還されたことを以下のように述べている。

40 年以上も前、私は毎年の新年を迎える日を「決意の日」とし、過ぎ去った年の内面の成長を確認し、開けた年における成長を決意するようにしていた。何回かの新年には、私は尊敬できる友人を招き、我々の人生の諸問題について語りあかし、そうした問題について我々の間での態度を比較した。また私は若い頃には、新年を迎えた日々に毎年の回顧と展望を紙に書いていた。私はそのノートを保存していなかったが、私が深く信頼していたニューハンプシャー州フランクリンに住む故マーガレット・ダイヤモンドには、1901 年から 1905 年のノートの写しを送っていた。彼女は私の手書きのものと彼女の手による写しを保管していた。そして彼女の死後、これらのノートと私が彼女に出した書簡が、遺族により親切にも私のもとに返還された。これらのノートを今ここに私が転写できるのは彼女の生前の忠実な友情によるものである。私は「年頭の自戒」をいつ始めて、いつ止めたのかについては覚えていない。おそらく 1900 年が最初の年で、1905 年の後まもなく多忙な仕事のゆえにそれを書くのを止めた。その代わりに時間のかからない黙想をすることにした。²

この日記の記述からもわかるように朝河は、自身が書いた「年頭の自戒」と彼女に送った書簡を彼女の遺族から返還されて初めて、自身の当時の生活を思い出すことができた。つまり、我々が知ることができる朝河のイエール大学院時代の生活は、マーガレット・ダイヤモンドの遺族が朝河の生前に「年頭の自戒」や書簡を返すことがなければ、永遠に知られることはなかったものである。

マーガレット・ダイヤモンドとの出会いと文通

では、このマーガレット・ダイヤモンドという女性はいかなる人物であったのか。朝河が彼女に出した書簡の内容からは以下のようなことがわかる。彼女は朝河が学んだダートマス大学の近くのニューハンプシャー州フランクリン在住で、その町のおそらく会衆派教会に所属し、Y.M.C.A. の活動などを積極的に行っていた信仰深い女性である。朝河はダートマス大学時代の友人でフランクリンに実家があるアール・イーストマン (Earl Eastman) と彼の恋人デラ (Della) の紹介で知り合ったと述べている [1899 年 10 月 6 日]。二人が最初に出会ったのは、朝河のダー

² 朝河の英文の日記は、イエール大学スターリング図書館所蔵の Asakawa Papers(朝河貫一没後に集成された朝河貫一の文書集成)の Box 5, 6 にある。1945 年 12 月 22 日の記述は、Box 6, Folder 55, p.726 にある。なお Asakawa Papers は、60 ボックスのうち 14 ボックスはマイクロフィルム化されており (日記もそのなかに入っている)、日本では東京大学史料編纂所、早稲田大学アジア太平洋資料室が所蔵している。

トマス大学卒業とイエール大学大学院入学の間の時期にあたる 1889 年の夏と思われる。この夏に朝河はフランクリンを二回訪問しているが、そのときに彼女と実際に会ったのだろう。³ 朝河がフランクリンに行った理由は、彼女が教える教会の日曜学校に出席するためであった。朝河が書簡で「私が無作法な若者であるにもかかわらず、あなたの日曜学校のクラスに受け入れてくれたことを感謝している」[1900 年 2 月 1 日]と書いていることから、ダイヤモンドが教えるフランクリンの教会の日曜学校に朝河が出席し、知り合ったことがわかる。また Asakawa Papers には、朝河が 1889 年にフランクリンの Church Missionary Society で行った講演会のための原稿が残されているが、この講演はおそらく、この夏の二回目のフランクリン訪問時に行ったのではないかと推定される。ただ講演原稿には、朝河自身の書き込みでこの原稿を実際にフランクリンで読み上げたかどうかについては記憶がないと書いてあるので、講演を本当に行ったのかどうかは定かではない。この講演原稿の内容は、明治維新後に国際社会の仲間入りをした日本が、今後、どうしたら西洋世界の人々に理解してもらえるか、という内容であるが、東西文明の相互理解を目指す朝河の意思を見て取ることができて興味深い。⁴

ところでマーガレット・ダイヤモンドは、朝河が Miss Margaret Dimond と書簡で呼びかけていることからわかるように、独身女性であったことは明らかだが、年齢は当時おそらく 50 代ぐらいであったと思われる。理由は、書簡のなかで彼女の母親が 1899 年に 80 歳になったことに触れ、「あなたの母親が 80 歳の誕生日をつつがなく迎えたことを嬉しく思う」と書いていること [1901 年 7 月 13 日]、また、彼女の甥がフィラデルフィアの大学で歯学部の学生で歯科医になろうとしていることが言及されるので [1900 年 1 月 13 日]、50 代ぐらいと考えるのが妥当であろう。

また朝河は、彼女との文通で最後まで一貫して、Miss Margaret Dimond と名字で丁寧に呼びかけ、自身も K.Asakawa と名字でのサインを書簡の末尾に書いている。⁵ こうした互いの距離感のある呼びかけや親子ほどの年齢差を考えれば、恋愛関係ではないのは明らかである。書簡ではイエールでの勉学、信仰や教会に関する事柄、社会的、政治的な問題について書かれており、彼女がかなりの教養を身に付けた女性だったことが推察され、おそらく年齢差を超えて理解しあった文通相手だったと思われる。

³ 朝河は1900年の「年頭の自戒」のなかで、1899年の8月と9月の間に二回フランクリンを訪問したことに言及している（『朝河貫一書簡集』早稲田大学出版部、1990年、731頁、参照）。

⁴ Asakawa Papers, Box 7, Folder 58, "Address-untitled (to Church Missionary Society, Franklin, New Hampshire, 1899)".

⁵ 朝河は1900年10月28日の書簡で彼女にお互いにファーストネームで呼び合うことを提案し、「あなたが私の名前での呼びかけでMrを付けなければ、私もあなたに形式ばった呼びかけをしないだろう。私の女性の友人には最初に会ったときからまったくMrを付けずに私を呼んでいる人もいます」と書くが、同じ書簡のすぐ後で「あなたをMargaretと宛名で書いてみたい誘惑を感じるが、今まで通りに紳士的に名字で呼ぶ」と最終的にはファーストネームでの呼びかけを思いとどまっている。結局、朝河は彼女をファーストネームで呼ぶことはなかった。

朝河はイエールに落ち着いた 1899 年 10 月から彼女への書簡を書き始めるが、最初はほぼ毎週、自身のイエールでの生活について書き送っている。文通は朝河がイエールでの博士論文を終え、ダートマス大学の講師時代の 1905 年まで続く。最後の書簡は 1905 年 12 月 24 日のもので、ここでは朝河が翌年から日本に一年間帰国することが述べられている。出された書簡の間隔をみると、1904 年 2 月の日露戦争開戦の頃を境に、朝河は書簡を定期的に出すのを止めたことがわかる。開戦直後の 1904 年 2 月 14 日の書簡では、朝河が日露関係についてダートマス大学で講演した際、教室に聴衆が入りきれなくなり、大学の最大の講堂に場所を移しても入りきれず、結局、一週間後にダートマスの町でも講演を行ったことが書かれている。この 2 月 14 日の書簡を最後に約 10 か月の間、朝河は書簡を出していない。次の書簡は 1904 年 12 月 4 日のものである。理由は、朝河が 2 月から毎週のように日露関係について北東部アメリカで講演を行い、また秋には『日露衝突 (Russo-Japanese Conflict. Its Causes and Issues)』を刊行したことと関係があるだろう。すなわち、マーガレット・ダイヤモンド宛に書簡を書く精神的な余裕がなくなったものとみられる。いずれにしても実質的なダイヤモンドとの文通は、日露戦争の開始とともに 1904 年 2 月で終わっているが、これらの書簡には、朝河がイエールで学んだ三年間の生活について様々な事柄が書かれている。以下では、書簡の内容から重要と思われる部分を記しておきたい。

イエールでの生活

朝河は 1899 年 9 月からイエールで、ダートマス大学の同級生で数学専攻のヒューズ (Hews) と同じアパートに住み大学院生としての生活を始めた。朝河の日常は書簡から知るかぎり、大学の教室と図書館を往復するきわめて単純そのものの生活であった。午前中から午後 4 時までにはほとんど教室か図書館にいて、その後は毎日、散歩と「こん棒振り (club-swinging)」－「ヘラクレス」と呼ばれるこん棒を使った運動－をして、晩にまた勉強し、また朝には水風呂に浸かっていた [1899 年 11 月 12 日]。こうした健康に留意した生活のためか、一度インフルエンザで二週間ベッドに寝ていたが [1901 年 2 月 15 日]、それ以外は、イエールの大学院時代はほとんど健康に生活していた。

書簡のなかでは時折、アメリカ生活の苦労を垣間見ることができる記述に出会う。たとえば、アメリカ人が自分の名前を誰も正確に発音してくれないことを嘆いて次のように書いている。「アメリカに来てから、誰も私を本当の名前で呼んでくれなかった。ダートマスでは、私は六つほどの名前と呼ばれていた。寄宿舍で一番よく呼ばれていた名前は Assie である。また、Asa, Arthur, George, Henry, Harry と呼ばれた。現在でもなおハノーヴァーにいる何人かは、私の名前は Arthur だと思っている」 [1899 年 12 月 9 日]。確かに Kanichi Asakawa という名前は当時のアメリカ人には奇異なものにしか映らなかったろう。アメリカ人が発音できないのは当然だったはずだ。

また、生活のためにウェイターのアルバイトをしていたが、ある時期からは、図書館で日本語

関係の未整理の蔵書のカタログを作成するアルバイトを始める。図書館の仕事については、「それはかなり頭の使う仕事である。古い、忘れられた書物のカタログを作成している。正確な著者名、版、日付、出版地、大きさ、装丁の仕方を確認しなければならない。それらをカードにきれいに書き込まねばならない。ある本にはタイトルも頁もない。本の内容からおおよその日付を確定し、内容から著者も推定しなければならない。私はつねに事典を参照している」と述べ、この仕事よりもレストランのウェイターの方が楽しいアルバイトだと語る[1900年7月13日]。しかし、「まもなくウェイターの仕事辞めるのもっと勉強の時間が取れるだろう」[1900年7月25日]と書いているので、1900年の夏にはウェイターは止めたようだ。

また、イエールのキャンパスでの行事についても詳しく書かれている。大学での行事として何度も言及されるのが卒業式の際に行われる、ハーヴァードとイエールの間の野球とボートの試合である。ある書簡では試合について興奮気味に書き、「ハーヴァードがイエールを破った。理由はハーヴァードがピッチャーで勝利、イエールのバッティングがよくなかったからだ。試合には多くの観客がいたが、私もその場にいて興奮した。しかしイエールは、ボートレースではハーヴァードに勝った。こちらの方が野球よりもはるかに重要な競技だが、私は出費が高むのでボートレースは見に行かなかった」と述べている[1901年6月29日]。朝河はイエールに在学する日本人とも定期的に会合を開いていた。日本人同士の会合のなかでも、とくに皇太子[大正天皇]の結婚式の日の会合について以下のように詳しく書いている[1900年5月11日]。

昨日は日本の若き皇太子の結婚式の日だった。イエールにいる日本人は昨晚、結婚をお祝した。我々の民族は皇室への愛では心をつにしている。天皇はその政治的権力で絶対であるが、その権力を決して行使することがない。天皇は、議会を通じて表明される国民の意思を認めるのみである。ゆえに天皇は、我々の政治的な長というよりも国民の統一性と愛国心の体現者である。天皇は最下層の民衆にも愛されている。天皇は国民に憲法を与え、我々のために代議制の政体を確立した。皇太子は私よりも数歳若い。皇太子は我々の希望であり、人々に愛されている。

このように書簡で、日本人の皇室への尊敬の念を率直にマーガレット・ダイヤモンドに伝えているが、イエールにいた日本人留学生たちは「紀元節」の2月11日にも会合を開き祝っていた[1900年2月24日]。こうした記述から、日本人の留学生たちにとり皇室は、日本人としてのアイデンティティーを保証する存在とみなされていたことがよくわかる。

大学院の授業

書簡にはイエールの大学院の授業についての記述もある。朝河は大学院の一年目に、かなりの数の講義を受講しており、そこには大学院レヴェルのものだけでなく学部レヴェルのものも含まれ

ていた。1899年11月5日の書簡で、以下のように自身の受講科目について詳細に説明している。

まず、ボーン (Edward G. Bourne) 教授の「歴史研究と批判の方法 (Method of Historical Study and Criticism)」を挙げる。この授業は、研究者がいかを一次史料に基づいて歴史を研究すべきかを教示するものであった。これは教科書も用いたが、主として、文書、論文、書物の内容の正しさについて討論する授業であった。この授業で扱った一つの問題として、サミュエル・アダムズ (Samuel Adams) が行ったとされる「アメリカ独立の演説 (Oration on American Independence)」が、実は、あるイギリス人の捏造であることが証明された事例を挙げている。そして、こうしたやり方が、聖書の高等批評 (the higher criticism of the Scriptures) にも本質的に似ていると述べる。またこの授業には7、8人の参加者しかおらず、授業外の勉学も含めて時間とエネルギーを使うが、研究についての方法と批判の習慣を学ぶことができるものだと高く評価している。また、ボーン教授のもう一つの授業「アメリカの国民史 (American National History)」も受講していたが、その授業は独立革命以後の歴史の概説であり、高度な内容ではなかった。ボーン教授個人については、「正確な精神の持ちぬしで、授業はそれほど魅力的でも刺激的でもないが、その正確さは学ぶべきだ。鋭いが善良なまなざしを持っている」と評している。

続いて、サムナー (William G. Sumner) 教授の授業について次のようにいう。サムナーは老人だが、彼の評価は高い。大学者の一人で、大学で最も興味深い講義を行っている。体も声も大きく、講義では命令調で語る。多くの彼の考えはオリジナルなものである。彼は、「社会の科学 (Science of Society)」－内容は人種と社会構造の研究－、「産業組織の開始期 (Beginnings of Industrial Organisations)」、「ルネサンス期の産業革命 (Industrial Revolution in the Renaissance Period)」の講義を行っている。最後のものは中世から近代への変化を制度史的に考察した研究であり、とくに私には関心がある、と。このように朝河はサムナーの授業を絶賛している。

次には、自身の指導教員であったウィリアムズ (Frederick G. Williams) 教授の授業に言及し、ウィリアムズ教授は、「中世と近代のアジア史 (Medieval and Modern Asiatic History)」を教えているが、それとかなり学ぶところが多いもので、彼の父は有名な中国へのミッションであったと述べる。さらに、この年から学長になったハドレー (Arthur T. Hadley) 教授の「経済学 (Economics)」の講義については、それは初学者であろうが専門知識のある者だろうがどの学生にとっても有益であり、彼の経済学は、その出発点と方法で他の経済学者とはまったく異なると述べる。さらに、リチャードソン (Oliver H. Richardson) 教授の「宗教改革から革命までのヨーロッパの歴史 (History of Europe from the Reformation to the Revolution)」と「イングランドの国制史 (Constitutional History of England)」も受講したが、これらはそれほど専門の授業ではないが刺激的で示唆の多いものであった。またリチャードソン教授は自身の親密な相談相手だとも述べている。

一年後の1900年10月6日の書簡では、朝河が二年目に受講した授業について語られているが、そこでは次のように言われる。今年の授業はすべてが大学院のもので、昨年の授業が学部のものも一部含んでいたのとは違う。大学院の授業は刺激的だ。いくつかの大学院の授業は完全に講義

であるが、それよりも興味深いものは「専門演習 (research course)」の授業である、と。そして、「専門演習 (research course)」の授業のやり方について以下のように説明する。

そこでは教授はガイドであって教師ではない。教授は学生を研究がなされるべき方向に導く者である。教授は個々の学生に取り組むべきテーマを与える。学生は通常、オリジナルな史料に向かい、そのテーマを自分自身で研究する。次の授業でそれについて報告する。それに続いてクラスでは討論と批判がある。オリジナルの史料という言葉で私が意味しているものは、テーマを研究するにあたり最初に存在している史料である。後日に書かれたすべての書物は、どんなにすぐれていようが、またオリジナルのものよりも良いものであろうが、二次的なものでありオリジナルではない。たとえば、アメリカの憲法の形成の研究で、後の時代にかかれた歴史家の多くの素晴らしい書物は、どんなにすぐれていようが一次史料ではない。最初に読むべきものは、会議に参加した人々の書簡、日記、記録である。その後、二次文献に行く。オリジナルの史料を扱う際には、その真正さ、著者、日付、状態、価値を決定することが重要である。そのためには教室での報告と議論がとても有益である。

結局、朝河がイエールの大学院で学んだ最も重要な事柄は、上記の記述にあるような歴史学の研究方法であった。それは具体的には、一次史料と二次文献の区別、史料の批判的な分析、教師に盲従しない自立した研究、といった方法である。

1900年10月13日の書簡では、二年目に受講を始めた授業として以下のものが挙げられる。1. アダムズ (George B. Adams) 教授の「中世の制度 (Medieval Institutions)」、2. リチャードソン教授の「テューダー朝のイングランド (England under the Tudors)」、3. ウィーラー (Arthur M. Wheeler) 教授の「1760年以降のイングランド国制史 (English Constitutional History since 1760)」、4. ボーン教授の「革命と内戦との間のアメリカ外交史 (American Diplomatic History between the Revolution and the Civil War)」、5. ウィリアムズ教授の「アジアとアフリカでのヨーロッパの植民地 (European Colonies in Asia and Africa)」。これらの五つの授業はすべて大学院の授業であり、3. が講義で、それ以外は「専門演習 (research course)」であった。さらにゲストとして聴講している授業として、1. アダムズ教授の「イングランド史 (English History)」、2. ウィーラー教授の「1789年以降のヨーロッパ史 (European History since 1789)」、3. シュワーブ (John C. Schwab) 教授の「アメリカ産業史 (American Industrial History)」、4. エメリー (H.C. Emery) 教授の「経済学 (Economics)」、5. シュワーブ教授の「公共財政学 (Public Finance)」を挙げている。この日の書簡には自身の1週間のスケジュールも書かれている。それによれば、午前6時に起床し、朝食前に7時から8時までは独学で中国史を勉強する。8時から8時半に朝食を取り、8時半から9時には新聞を読む。その後は授業に出席し、また授業の準備をする。午後3時から4時には運動をする。午後6時から7時には夕食を取り、午後7時から8時には雑誌論文を読む。午後8時から10時には博士論文の準備を行う。月曜から土曜まで、このスケジュールに従い勉強

に励んでいた。

コスモポリタンの歴史学の形成

朝河は、イエールの大学院では自身の「大化改新」についての博士論文の研究を進めながら、西洋史を中心に多くの授業を取り、人文・社会科学の知識と歴史学の方法を学んでいた。彼のその後の歴史家としての生涯を考えると、イエールの大学院で様々な時代や地域の歴史を深く学び、とくに西洋の歴史学の方法を習得したことは決定的な重要性をもつ。朝河は、大学院の専門演習 (research course) の授業に出席することで、史料批判の方法や歴史研究の客観性や公平性の原則を学んだ。ある書簡では、歴史学の研究を行うにあたっての態度について次のように語っている。すなわち、歴史上の「真実以上に畏敬すべきものはなく、永続するものはない。真実は個人のものではなく、誰かをひいきしたりしない。私が歴史学の学生として研究するとき、私はどこかの国に所属する市民としてではない。私は虚偽以外の敵をもたない。私は他の人にも同じことを期待している」[1901年5月17日]。

このように朝河は、歴史学には国境がなく、ただ真実を求める学問であることを明確に述べているが、彼の歴史認識は、一定の党派や民族に与しないきわめて冷静で客観的なものであった。ある書簡では、戊辰戦争での二本松藩の敗北と自身の家の困窮も、歴史的にみれば日本の近代化のために役立ったことを次のようにいう。「日本では30年以上前に封建制を破壊する凄惨な内戦があった。私が生まれる前のその戦争で、私の父の財産はすべてなくなり、父の兄弟、義理の父も死んだ。国を動かしたのは下からの精神であり、国家を現在の地位にまで高めたので、この戦争は無駄ではなかった」[1900年7月1日]。またこの当時に勃発したボーア戦争については、「弱い立場で独立を求めて絶望的な戦いしているボーア人には共感以上のものが呼び起こされよう。しかし、よくあることだが、人道的な見方と神の意志とは別のものであり、我々の同情は必ずしも十分な深い思考に基づかないことがある。道徳的な判断を下す前に考えねばならないことがある」と述べ、イギリスの勝利の方が世界の進歩に結び付くことを示唆している[1900年3月15日]。また別の書簡では、イングランドの国制史を学ぶことで、「多くの不幸な状況が大きな幸福のステップになり、多くの悪が人類の進歩にとり重要なものとなることがわかる」と述べている[1899年12月16日]。

また朝河はヨーロッパとアメリカの近現代史のテーマに関して、イエールでの授業で多くの小論文を書いていた。ある書簡では「私は多くのレポートの作成で今忙しい。それらは、『中国人移民の待遇』、『モンロー宣言へのイギリスの関与』、『会衆派教会の起原』、『1831-32年のイギリスの議会改革』などである」[1901年3月9日]と述べているが、このような大学院での勉学があったからこそ、朝河は日露戦争時に日露関係の冷静な分析ができたといえよう。

さらに朝河がイエール大学院時代に、西洋中世史への関心を深めていったことも見落としてはならない。ある書簡では「私は今とくに中世ラテン語を勉強している。この言語は中世史の

研究のカギとなるだけでなく、東洋と西洋、古代と近代の全人類の運命のカギとなる言語である」と述べ、西洋文明の根幹にある中世研究の重要性を強調している。また朝河は、ハインリヒ・ブルンナー (Heinrich Brunner) の封建制の論文をアダムズ教授からの勧めで読んだことにも触れる。「私は今日、一つの古典的な歴史学の文献を読んだ。それはハインリヒ・ブルンナーの騎士の奉仕に関する論文であり、ドイツ語で 38 頁あるが、そこには深い学識と鋭い知性を感じられる。アダムズ教授がこの論文について、彼が知るかぎりで最高のものだと言ったのも当然である。この論文を読めば、自分がいかに歴史研究とは何かを知らずにいたことがわかる。それほど論文である」[1902 年 5 月 18 日]。また、1899 年の自身の冬休みの読書として、西洋中世史の文献 (Weizen, "Siedlungen und Agrarwesen", Sohm, "Institutes of Roman Law", Maitland, "Doomesday Book and Beyond") を読む予定であることも述べている [1899 年 12 月 22 日]。さらには、メイトランド (Frederick W. Maitland) が翻訳したギールケ (Otto von Gierke) の『中世の政治思想 (Political Theories in the Middle Age)』を購入して読み感激し、「この著者と翻訳者は近代国家システムを中世ヨーロッパから跡付けようと試みている。古代と近代との接続が説得的な仕方では提示されている。著者は中世の法学者と教会法学者によるラテン語史料の多くの参照を行っている」[1901 年 7 月 13 日] と語る。

キリスト教への態度

文通相手のマーガレット・ダイヤモンドが敬虔なクリスチャンだったこともあり、書簡ではキリスト教の問題も重要なテーマとなっていた。とくに朝河がイエールで出会ったマンガー (Munger) 博士についての記述は興味深い。マンガー博士はイエールの会衆派教会の牧師であったが、彼は、20 世紀のキリスト教はキリスト自身の実際の教えに近づかねばならないとともに、進化の新しい理念も受け入れて修正されねばならないと考えていた [1899 年 12 月 2 日]。朝河はマンガー博士の自宅を訪れ、直接対話し感化された。朝河のキリスト教への態度もマンガー博士との接触のなかで、現状の社会の進歩に適合した宗教思想としてキリスト教を理解しようとする方法に向かったようにみえる。

朝河はイエール大学院在学中に、コネチカット州ハートフォード (Hartford) にある会衆派教会の牧師養成神学校である Hartford Theological Seminary を訪問したこともあった。1904 年 4 月 13 日の書簡で、そこでの印象を次のように述べる。「ここは別世界だ。そして狭い世界である。建物は一つしかなく、12 人の教授と約 70 人の学生がいる。彼らは皆、一定の定まった方向でのみ考えることを期待されている。人間知性の他の方向性での活動は、ここでは見る機会がほとんどない。彼らは皆、この一つの建物に住み、聖歌を歌い、礼拝し、食事をする。ある者たちは優れているが、ここでの教育や環境に不満な者もいる」と述べ、ここでの信仰の自由のなさを指摘する。さらに朝河は同じ書簡で、キリストの贖罪という根本観念を字義通りに解釈することにも疑義を呈し、「すべてのキリスト教徒は、キリストが神の子でありながら世界の罪のために受難

したという教義に同意するのだろうか。この教義は寓話的な意味をもち、歴史上、多くの寄与をしてきたが、19世紀の人間にとり、神が他の人間を救うために一人の人間を殺したと信じることができるとは私には思えない」と述べ、キリストの十字架上の死について、それをあくまで教義上の寓話として理解すべきだという考えを述べる。

またマーガレット・ダイヤモンドが新島襄の伝記を読んでいることを知り、朝河は1900年3月8日の書簡で、新島襄について次のようにいう。「新島は我が国のために多くのことを行った人物だが、彼の研究方法、宗教的な教義、彼の仕事の理念は今や時代遅れである。何よりも私が嘆くのは、彼がその仕事を始めるにあたり、外国人の資金によって始めたことである。それは深刻な誤りであった。その結果、彼の学校は時代遅れとなった。もう一つの新島の誤りは、彼の学生の多くが彼のやり方を信じて、アメリカの慈善団体の資金によりアメリカで勉学し、日本でもミッション活動をアメリカの資金で行ったことである」。朝河は新島が外国人の資金により、その事業を行っていたことを痛烈に批判している。この記述からは、朝河が考える日本人のクリスチャンのあるべき姿がよく見て取れる。

博士論文の完成からダートマスの講師へ

朝河は書簡のなかで、博士論文の内容についてはほとんど触れていない。おそらく、マーガレット・ダイヤモンドに「大化改新」の内容を語っても理解してもらえないと考えたからであろう。朝河は歴史学の分析の方法はイエールの大学院で学んだことは明らかであるが、博士論文での史料の読解や史料批判については、ほぼ誰の指導も受けず独力で行ったはずである。書簡のなかで博士論文に言及する箇所がきわめて少ないのは当然なことだが、ある書簡で朝河は、博士論文を簡潔にまとめる努力をしていることを以下のように述べる。「私は今、博士論文を書いている。200頁以上は書き終えている。そして現在、第三章に取り組んでいる。さらに三つの章を書く予定だが、最も長い章は今、書き終えた。全体がどの程度の長さになるのかはわからない。しかし300頁は超えないようにするつもりである」[1902年3月19日]。

結局、提出した博士論文は好意的に評価され、1902年6月に博士号が授与される。その後、9月から朝河はハノーヴァーでダートマス大学の講師となるが、イエール大学からは博士論文を刊行するためのハドレー奨学金が授与され、博士論文は改訂を行った後、1903年に出版された。その後に朝河を待ち受けていたのが日露戦争であった。朝河はダートマス大学で東洋史を教えていたこともあり、周囲から日露関係についての講演を期待されるようになる。日露戦争勃発直後の1904年2月14日の書簡では、日露戦争のニュースを聞いたがっている学生のために講演を行ったことが、以下のように言われる。

学生たちが戦争のニュースを開きたがっている。私は先週の金曜日に、翌土曜日の晩に私がロシアと日本の状況について講演する旨のポスターを貼ることを許された。だが私は百人も

入らない教室を取った。皆からもっと大きな教室を使うように示唆されたが断った。私自身が企画したことで、大群衆に話すのは適切ではないと思ったからだ。本当に興味がある人だけに聴衆を限定するため、参加できるのは関心ある学生のみとし、教員や女性はお断りと周知した。また講演は2時間半とした。だが、これらの予防措置は意味がなかった。昨晚、講演を行う建物に着いたとき、教室だけでなくそこに至る階段にも学生や教員であふれかえっていた。彼らに説得され、カレッジの最大の講堂に移ることにした。人々はものすごい勢いでその場所へと駆け込んだ。だが多すぎて、全員が中に入ることはできなかった。人々は椅子を持ち込むか、立ったまま聞いていた。おそらく学生全員がそこに参加していた。私は1時間以上、戦争の意義と原因について愛国者の視点からではなく、一人の研究者の視点から説明しようとした。私はこの町でもう一度、講堂に入れなかった人や公衆のために講演をしなければならない。またこの後、他の町にも講演で呼ばれている。私の仕事が大変な状況にならないかぎり、戦争の意義を知らせる講演の機会を引き受けるつもりだ。

この後の時期、ダイヤモンド宛の書簡は半年以上途絶える。次の書簡は12月4日のものである。この長い文通のブランクは、明らかに朝河の生活が日露戦争で激変したことを示している。朝河は夏までの間に日露関係についてアメリカで約20回の講演を行っている。⁶そして11月には英文の著書『日露衝突』を刊行した。長いブランク後の1904年12月4日の書簡では『日露衝突』のことが触れられている。「私の書物（『日露衝突』）は現在販売中で、アメリカとヨーロッパで広く読まれることを期待している。――あなたは私の本の書評をいくつかは見たであろう。しかしこれまでのところ、学問的な立場からの書評はない。私がそこから学ぶものがある書評もない。どの書評も私の論述の方法については触れていない」と述べ、自分の本が必ずしも正確な評価を受けていないことへの苛立ちが窺える。1905年に出した書簡も全部で6通と数少ないが、最後の書簡は1905年12月24日のクリスマスの挨拶で、「私は日本に帰国することを考えている。1月22日に出発し2月16日に着く予定だ。今その準備をしている。おそらくアメリカへの帰国は1年後になるだろう。出発前にチャンスがあれば一度お会いしたい」と述べる。そして、この書簡をもってマーガレット・ダイヤモンドとの文通は終わる。

おわりに

マーガレット・ダイヤモンド宛書簡から知りうる事実とは、以上述べたものだけではないが、ここで紹介した事柄からだけでも朝河の歴史研究がいかにイエール大学院時代に深まったのかを理解することができよう。彼が博士論文として『大化改新の研究』という画期的な著作を書くことができた背景には、イエールの大学院で歴史学の方法について十分に学んだことがある。また書簡か

⁶ 「年頭の自戒1905年」（『朝河貫一書簡集』早稲田大学出版部、1990年、751頁、参照）。

らは、朝河の知的な関心が多岐にわたっており、歴史学のみならず社会科学、キリスト教、同時代の国際関係など広範なものだったことがわかる。日露戦争勃発後に毎週のように講演活動を行い、日露衝突の原因についての書物を出版できた理由は、まさに彼がイエール大学院時代に研究者としての分析能力を身に付けたからといえる。

朝河は日露戦争に際して、ロシアの植民地拡大の野心を批判し、日本が国際的な正義の側に立っていることを主張したが、ポーツマス条約後、日本は大陸での植民地拡大の道を歩むことになった。彼が日露戦争時にアメリカで行った主張は、まさに日露戦争後の日本により裏切られたといつてよい。その思いから朝河は、日本語での唯一の著作となる『日本の禍機』を1909年に出版することになる。そして研究者としては、次第に日本と西欧の比較封建制の問題に取り組むようになった。朝河は1910年代に多くの比較封建制の論文を書き、1929年に出版された『入来文書』では、日本における封建制の存在を世界に向けて紹介するとともに「論点の要約」の部分では日欧の封建制を比較し、日本と西欧の封建制の類似と相違を明晰に論じた。

朝河の歴史家としての生涯を考えると、彼が本格的に日欧の比較封建制についての構想を抱くようになったのはイエールの大学院時代であり、何よりイエールで生涯の恩師となる中世史家のアダムズ教授と出会ったことが大きい。この後の朝河の比較封建制史家としての活躍については、また稿を改めて論じたいが、いずれにしても朝河のイエール大学院時代は、その後の研究の方向性が定まっていった点で決定的に重要な時代であった。その意味で、朝河の歴史学者としての自己形成過程を知ることができるマーガレット・ダイヤモンド宛の書簡は、史料的な価値がきわめて高いものといえる。